明治八年十月刊行

加藤熙著

皇國體歌畫

東京 弘成堂發兌

特42
524

皇國體歌序

歌者心之苗。心者形之氣。而形交於物。心動於中。則發焉。於是乎。或徐或疾。為鄭為衛。人各不一。此也。神陰加藤翁嘗作皇國體歌三篇。上自

明治八年十月刊行

加藤祐熙著

皇國體歌畫

東京　弘成堂發兌

特42
524

皇國體歌序

歌者心之苗。心者形之氣。而形交於物。心動於中。則發焉。於是乎。或徐或疾。為鄭為衛。人之不一如此也。神陰加藤翁嘗作皇國體歌三篇。上自

神世下至天正年間。大凡事物之交於形者。無不詠入於詩也。然而不徐不疾。非鄭非衛。其考正整朗爽。感人也大矣。頃日刻其第一篇。將使知事物之所以交於形者也矣。

嗚呼正整朗爽之交考。與篇之美意洋洋乎中國者。期而可待也。乃喜為之序。

明治乙亥之秋　馬杉豫

參考資料室

序

道てふものいかなるものなるかは所をも日をもしら
ぬ者なれども川を渡さまんまいのそらりうを結ぶと
ゝん物なるに舟橋を作りて万人の一人二人渡
るて所をより第一の第うまうをつくる功を給まとを太の
ふ所をを作ること年さ人さんあほまりふ志ぬし

世の大の〻北山寺なる所にて行とする人の声を聞て
おもひたち嵯峨の御所に詣人のうけ姫〻ふまし
てしとめ給ふをかなきぶつまれさるこそその橋をお
けるあ〻一人の功ある花とうるへきひとりの人にて百尉
はなれ〻てのさる大道ぶ山をふらしてふこそ
め給ひしその神の御功とは〻月〻その御恵を

のこ夢りてきのふ〻とうちるるまゝ道の大乱
るゆえ〻〻〻一さきをこのる世ふ有りていさ〻に此の大
御恵を忘さしてうちるれ世もまゝ心ある人
の本意なく免やいそをあ〻ず七ずに結ひ法
師く里の子の神学びるるそその大のぶ志〻喜そ
我桜花大人のまの世〻重〻れの歌世をよろ見

に浅からぬあちらけなきつゝ能とうなかゝ
よみおほえそのふきこゝろある人そしるべき

千万振神代のそもも里の子か習ふる業の
外なるべんやハ

癸亥春抄　阿蘇大宮司阿蘇惟治

皇國躰歌畫

附言

此書ハ神代より近世まで傳神統之大畧并皇学祭典教道等之大本を述なる也教道に與る者ハ勿論漢洋佛の学者ありとも必ず小学幼稚の時より諳誦して教導孔子の春秋を以共全く三傳を待て後其説始て詳かなり去まで此本文をバ紀傳史傳及王祥ホ之書に付漢土の経籍より成精〳〵考して能其義を悟るべし其微意は今口授筆記の及所にあらず讀者朝夕背誦して能其説を

東京帝国大学図書之印

求めなバ必ず自ら得る者なりん

一此書ハ古事紀を本とし中古以来之書籍をも其宜しき
を採り大凡を挙げ其實ハ本文に依て其説を敷
衍し造化の參神を初めて神徳ホ之大意を示さんと
欲するのみ今一職を辱ふして餘力及なりしば
姑く後の学者を待のみ

明治九年三月

加藤熙誌

皇國體歌盡上卷

常陸　加藤熙著

言巻と文小畏く
八隅知我大王此
玉垣此内津國かる

掛巻と綾小尊此
知し食ス磯輪上秀眞
神國此千五百萬乃

古を考見れば
生産る御祖ハ天之
神産靈宇麻志葦牙
五柱別天津神
開けあり計る
猶其後を尋れば
天地の初發の時に
御中主高産靈や
彦男の神天之常立
在まして此天地ハ
國之常立豊雲野
泥土煮の神沙土煮や
大戸道の神大戸の辨
伊奘諾の神伊奘冊や
此二神も殊ふ又
並立して畫鳴ぜ
自凝島ふ天降理
角杙の神活杙や
面足の神惶根や
神代七世を継々て
國造らむと浮橋ふ
瓊矛の末ふ生出し
天之御柱八尋殿

見立賜ひて廻り逢
淡路の島や壹岐の島
筑紫の島は面五ツ
大倭おる秋津島
此外他ノ國々ハ
塩沫凝て成ぬとそ
蛭子淡島引續き
伊豫の二名の面四ツや
津島ふ隠岐ふ佐渡の島
吉備の小島を生坐て
國の八十國八十島や
國生終て更ふ又
生坐ル神ハ八百萬
速秋津彦秋津姫
因りて持分水の神
風の御神の級津彦
山の神とて山津見や
此二柱山と野ふ
大綿津見や水門ハ
此二柱河海ふ
尚八柱を生坐ぬ
木の御祖とて久々之智や
草の神とて草野姫
因りて持分八柱の

神々さへを生むふ
大食津姫に御食津神
金山彦ふ姫神や
水の神ゐる罔象女
稚産靈てふ神ふ又
産賜て根國ゑ

鳥の石楠船之神
火の焼速男火の神や
土の神ゐる埴安や
香山ふ坐ル泣澤女
其御子豊受姫神を
神避まして其後ゑ

花の時ハ花さゝけ
歌ひて舞ひつ祭ヲハ
火の迦具土を斬賜ふ
石拆根拆石筒男
谷龍雷闇罔象
山津見之神八柱そ

幡立笛吹鼓擊ち
是そ祭りの初ある
其御刀に成坐る
甕速樋速建布津や
又御體ふ生坐て
夜見の國ふハ雷の

八種軍の千五百あり
千人を絞る女の神ゝ
御誓一ハ尊にま
黄泉乃國との通路ハ
尚大御身の禊よハ
檍原ゝて身洗まー

黄泉醜女ゝ又有て
千五百を産に男の神の
是より顕ー國々ゝ
道反の神塞り坐ー
日向の小門の橘の
投棄賜ふ物ゝ因り

生出ませる神等ハ
二柱ある神等ゝ
滌きて成れる神の名ハ
大禍津日の神こ坐て
其曲事を直さむと
神直日の神大直日

船戸道俣の十餘り
其中津瀬ゝ降潜き
八十禍津日ゝ添まーて
猛く荒ふる神ゝ坐ハ
又生産る神の名ハ
直ー玉して伊豆の女や

速秋津姫成りまし
成坐神ハ畏きや
中津綿津見中筒男
筑紫の志賀の海の
又墨の江の三柱を
文ゑ畏き日の御神

水の上底中ゑして
底津綿津見底筒男
上津綿津見上筒男
神の社乃三柱ゑ
左りの御目を洗ひてハ
右りの御目を洗ひてハ

最も尊ゑ月讀や
武く雄々し須佐之男や
高天原を令知食
夜の食國知食
海原のきて天の下
速須佐之男の命ゑハ

御鼻洗へる時なまさ
さて天照ゑ太御神
又月讀の尊ゑ
又須佐之男の命ゑハ
詔分任まつれそし
御妣の許の根の國ゑ

罷り坐むと念ふして
誓立して安の河
五柱なる男御子と
三柱ませる女御子と
國の造縣主
臣の祖神成出る

雲霧沙り天翔
十握劍と勾玉と
佐賀美ふ噴し氣噴よて
天津日嗣の忍穗耳
直稲置や諸比
清明き心よ誇りま

畔放溝埋重播種や
生剥逆剥許多の
荒ぶまはるそ日の神ハ
隱り坐へハ天地を
神ゝ皆涌き千萬の
八百萬神諸共よ

屎戸樋放串刺や
天津罪をハ犯つ
天の岩戸よ刺隱り
常世行つ如五月蠅
禍事まてゝ起りふ
安之河原よ神集ひ

集い玉ひて神議り　議り玉ひて八意思
思金之神思ハしく、　長鳴鳥を鳴しめて
石凝姥ハ御鏡や　玉の御祖ハ御統の
珠を造りて明玉　天の御蔭小雑々め
刀斧鐵鐸を造らしめ　天の日鷲ハ穀種て
天の白羽ハ麻種て　天の羽槌ハ文布織り

天の御桙を司さし　織機姫を織女と
手置帆負と彦狭知　瑞の御殿矛盾と
御笠を造り香山の　五百枝賢木の玉串ハ
野槌の神ハ造らしめ　天児屋根と太玉の
命ハ令占擬かハし　賢木の枝の上枝か
御統の玉取附て　又中つ枝ハ鏡懸け

下枝に幣を取垂て
火處焼て槽伏て
髻や手次手草ーて
胸乳掛出裳緒垂き
俳優かーて萬神
阿那面白ー天の原

大幣や太詔詞
鈿女の命神憑り
茅纏の矛を衝立ー
高天原もとよむまて
歡喜笑樂ハあ〜樂ー
震動あーて石戸をし

押開ましし手力雄
再ひ御坐を御光を
高天の原ゝ葦原ゝ
荒振神乃曲事ハ
八咫鏡こそ日の神の
初造きる御鏡を

御手賜りて太神の
顕ハー奉り標結へハ
又糎きて明行ハ
消て〜跡る〜治りぬ
御像代まて畏きれ
紀の日前ゝ齋きつ、

其時造れる日矛をハ
神とそ齋ひ祭まつる
千位置戸を科つゝ
爪をも拔て逐ふき
稻穗麦粟大豆小豆
取しめむひ日の神ハ
同一國ある國懸にて
さて須佐之男の命ハ
神逐ひて髭を切
此時産靈の御祖神
稗や蜀の種まてゝ
蒼生の為そ少てゝ

田畠の種を蒔むひ
養蜀紡織始りき
出雲國の肥の川ふ
蛇の尾より叢雲の
太御神ふそ捧けれ
八重垣造る八重垣の
又香山ふ栞殖て
速須佐之男の神ハ又
八俣の蛇を斬散り
靈き劍を得むひて
出雲八重垣妻籠に
三十一文字の御歌有り

尚し此神韓國も
先浮寶有可しと
枝さへ造らし其御子の
新羅の國よ押渡り
有とあらゆる木種をハ
是の皇國ふ殖ふ

金白銀有りと聞
相や檜や被楠の
五十猛の神諸共よ
島の八十島巡りまし
他國よハ殖をして
されハ御子とし韓の神

有功の神と紀の國の
神の社ふ齋ひふ
八島士奴見の大神ハ
大市姫の生産る
御食つ物掌る神等と
大凡任の事終て

名草の郡伊太祁曽の
櫛名田姫の生産る
大國主の神祖そ
大年の神宇賀の神
靈ふ坐すし尊しや
遂ふ御母の神の坐

根の國まこそ入玉へ
其兄弟の八十神に
稲羽小行て白兎
伯耆の國の手間の山
漏遁れ出根の國の
許々多久の攻除玉ひ

大國主の大神ハ
種々の責受つゝも
助け玉ひて其後に
山の大樹の木の股を
蚯蜈蚣や蜂の室
天の詔琴生弓矢

生大刀まてゝ取持ー
皆順伏へる御功徳ハ
外ハ八十國造り成ー
天下經營らーて猶又
法ごを定め殊更ふ
渡り玉ひて幸魂

兎鼠や昆蟲も
内ハ八十神追拂ひ
少彦名と二柱
醫藥の方と禁厭の
異邦指て大海原
奇魂との奇異ある

御功業終て神南備の
其妻問の御歌おそ
尚し御孫の八十神ハ
聖之神や竈之神
御年の神ふ大土や
高天原ハ如此て又
御諸の山ふ鎮りぬ
是長歌のをめなき
向日之神御井之神
阿須波波塩岐ふ松の尾や
内外の事ゝ備りぬ
安之河原に八百萬

千萬の神神集ひ
議り賜ひて葦原の
水穂の國ハ天壤と
日月と共ふ樫の木の
弥継々に吾御子の
知さむ國と大御神
高木の神の詔以て
天稚彦ふ天の穂日
國體見よと遣ハされ
建御雷と經津主と
鳥船の神三柱を
又降ーまーー千早振

荒振神を撥い平
事避令て媚鎮め
言向和し返り言
三種の寶のみなゝ以
豐受之神石門別
天の鈿目ゐ玉の祖
國造らゝい大神も
葛木の神洲羽の神
奏し賜へハ更ゐ又
思金之神手力雄
天児屋根ゐ太玉や
石凝姥之命等

并せて五ツの伴の緒を
神の御祖の神ゐ又
二柱ゐは石靫を
大刀を帶して真鹿矢を
手握り持し久方の
太玉串ゐ大祝詞
配り加へて大伴の
久目の直の神の祖
取負ハめて頭推の
手狹ミ持し波士弓を
天村雲押雲根
祓ひ清めて日の御子の

瓊々杵の尊天の原
天之浮橋蘇利立志
千別ふ千別猿田彦ハ
槌觸嶽ふ天降り
底津石根ふ宮柱
高天の原ふ氷木高く
磐坐放石戸開け
天之八重雲押分て
御前ふ立て高千穂の
笠沙の御崎求通り
大敷立て安らけく
高知坐ハ日の御蔭

天の御蔭と隠り坐
日月と共ふ高御座
知食しける其時に
顕ハし申ハ功をハ
猿女の君と名ふ負し
齋庭ふ高〻祭らせて
常磐堅磐ふ天地と
弥平らけく天の下
鈿目の神の猿田彦
殊ふ賞まし其神を
鰭の廣物狭物をも
宮仕する女さへ

猿女と云ひて御代〻に
加之物部や
世の継〻に相承て
中執持ちて其職
尓て木の花咲耶姫
御子四柱の中ふしも
速贄先ふ賜ふとぞ
諸部の雄の神等も
桙の本末傾この以
任しの任ま仕来ぬ
火の眞盛に生坐る
彦火〻出見之命こそ

天の下をは知しれ
御坐せし時ふ愛やし
幸取代し事ふより
宮ふ坐まし奇靈なる
帰来まして御威徳さへ
兄の命ハ順従て
此皇祖尚若く
兄の君ぞ海山の
三年の間海神の
潮の盈乾の玉を得て
盛ふ坐せぞそこ故に
八十連まて俳優の

人と成りて狗の如
是隼人の始祖なり
産屋造りて鰐を刈り
伺見せーを慚恨て
是海底と此國の
扨高千穂の宮所よん

宮墻離ら仕來ぬ
豐玉姫はかくて又
御子産時ふ夫君の
海坂塞て返りぬり
通路絶ー所以とぞ
五百年餘り八十年ゑ

知食ーぬと書ふ見ゐ
幾萬代ゐ過ふけむ
不合命継給
御乞沼の御子ハ波の穂を
稲氷の皇子ハ頓て又
御母の國ふ入まーて

是より上ハ幾千歳
尚其後は鶉葺草葺
御子四柱の其中に
蹈て常世ふ渡りまし
海原越て海の
五瀬の皇子ハ痛矢串

負て崩座しのは
天日嗣を知し食し
高知坐て橿原の
治給ひて是より大
年月日迫正敷し
人皇此大御代と

磐余彦なる命こそ
千代萬代の高御座
都を開き八洲國
丈の有様に異すて
御典の上に著明
稱奉れる御世に無窮

附録

尚辞別て言むよハ
生成賜ふ國かれハ
八百萬ゐる神等ハ
残る隈なく八衢に
八十禍津日の荒来て

此の皇國ハ神祇の
其天地の開闢より
野よりも山よりも浦回より
磐群の如塞り座
疎ふる者の上行も

上をも守り下往ハ
間ゝあゝさん此御世を
千長の御世の足御世と
凡御國の御制度ハ
其政やうて又
睦月元めの朝より

下をゝ守り夜晝め
嚴の御世と守り坐し
鎮め在せハ昔より
神の祭を政
神ゝ傳ゝ道ゝして
十二月晦日の夕へまて

朝廷の事ゝ民草の
神ゝ仕ふる事業の
其大凡を述んゝは
衣更着四日の祈年ハ
彌生半の鎮花祭
疫やミを禳ふ祭事

行ふ仕業ゝ大方ハ
外ゝ尊き事そなき
四方の拜を初ゝて
五穀をし禱るなり
次ゝ卯月の三枝ハ
夏と秋との其始め

廣瀬立田の二社
祭るハ雨風祈るなり
服部と麻績の祭也
御門の内ゝ庶人の
又道饗の祭りよは
又九月の神嘗ハ

大忌祭風の神
四月の望の神衣ハ
水無月極月月次ハ
宅の神祭ゝ異なゝ
鬼魅を四隅ゝ禳ふ也
初穂を奉出ゝ神祭

霜月上の卯の日ゝハ
下の卯の日ゝ行まふる
其寅の日ゝ祭らるゝ
今日を限りの年の夜ハ
拜み明す事そかし
其大嘗の御祭は

相嘗祭大嘗は
御魂鎮の祭りをハ
極月ハ別て火鎮や
何國の人ゝ明るまて
初て御代を踐祚
取別き重き御祭そ

凡祭祀の禮式は
神主祝部中臣や
手置帆負ヤ日鷲の子
火を鑽火を吹盖を取
祖の事ゝ受継て
齋潔麻波利弱肩に
神祇官より下つ方
忌部ト部を初まて
伴ゝ安曇ゝ車持
凡百の業ゝ家々の
百の官の人ゝ皆
木綿手繦掛榊葉ゝ

木綿垂掛て打拂ひ
爰を祝ひの齋庭とし
伊豆の席を苅敷て
有まとゝ今日の此日をハ
擇ひ定めて稱言
天津祝詞の大淳辞
御注連の縄を引延て
神籬を立て伊豆の真屋
忌籠りゝ八十箇日ハ
生日の足日の吉日そと
竟奉る辞ゝハ
拔の詞神賀

嚴の咒詛ヤ事々に
奥津御年ハ初稲の
千穎八百穎神穎の
又堅盛の大贄や
瓫の上高知瓫の腹
青海原ゟ住物ハ
詞竟奉事そらし
千稲八百稲荒稲の
千稅餘り五百稅
白酒黒酒忌瓮や
滿並ぶ八十平瓮
鰭の廣物又狭物

奥津藻菜ゟ邊藻菜や
荒き物をル捧けハ
和妙荒妙照妙ゟ
御調の絲や衣笠や
楯桙御馬ゟ至る迫
宇豆の幣帛曜和幣
山野の物ハ毛の和き
甘菜辛菜の種々や
明妙さ〳〵御衣しとし
鏡と玉と弓矢太刀
品の種々獻
明和幣や大幣を

横山の如廣前ゐ
捧け持つゝ百取の
置高成て八平手や
打開き広る手掌ゐ
庭燎火處里神樂
大和の琴の東歌

置足ハーて大前ゐ
扒引居置充て
平手打擧天地を
撩亮拍上奉り
幡建笛吹鼓擊
東遊ひの神遊ひ

大前張ゐ小前張
大き小きき手量や
神の伊垣ゐ袖掛て
鐸の音清千世八千世
禍津日の神諸々の
荒ぶる神ゐ神直日

催馬樂歌や國栖の舞
巨きと細き音殼や
舞バそ開く八少女の
祝ひ奉りて崇神
五月蠅なす沸騰り
大直日よそ聞直し

見直し如く媚鎮め
公民に至迫
己の乖々不令在
宮比の御魂幸ひて
大御詔持行るらは
大御神等海原の
朝廷を始天の下
手足の躓不令爲
邪く穢き心無く
又異國に事有りて
我津の國の墨の江の
邊より奥より神集り

潮の八百會に守り坐
蝦夷の千島の外迫る
見霽坐四方の國
靄く極み白雲の
舟滿續け陸よりは
千種の寶奉り
任那諸越高麗百濟
殘る隈無知食し
八十島あけて青雲の
向伏限り海原は
馬立續け貢物
峻き國ハ平らけく

狹き國をハ押廣め
遠き國を八十綱を
打掛て引き寄る如
恵み幸ふ事れれハ
天地の神祖神
慎み敬ひ恐みて
齋き祝いて祭りた
貴き賤しき程々に
氏の神たち産土沙や
國魂の神守り神
家内の神の神祇の
御蔭を仰き拜て

勤む事を務れ牧
尚其道を極めなた
天下をも治めんハ
其掌を指さしのや
かゝる愛度神國の
神の御裔の人らして
侘し國への曲事の
惡し神ふ率ゐを
道の本末忘れるハ
人の人たる甲斐やある
本を忘ル今爰ふ
初學する子弟の

分て入〳〵き神道山
千代の古道尋ねつゝ
如此綴ぬるも中々に
雖然雅子は
君の御為小語り継
冬籠〳〵て咲花も

麓をたゝる栞りそと
櫻の落葉掻集免
無禮畏〳〵負乞るし
憐此を見て國の為
天地榮ゆる初そと
今を春〳〵と難波津の

浅〳〵ハあらぬ浅香山
只直心の一向に
魂の御柱衝立て
神習いつゝ朝夕ふ

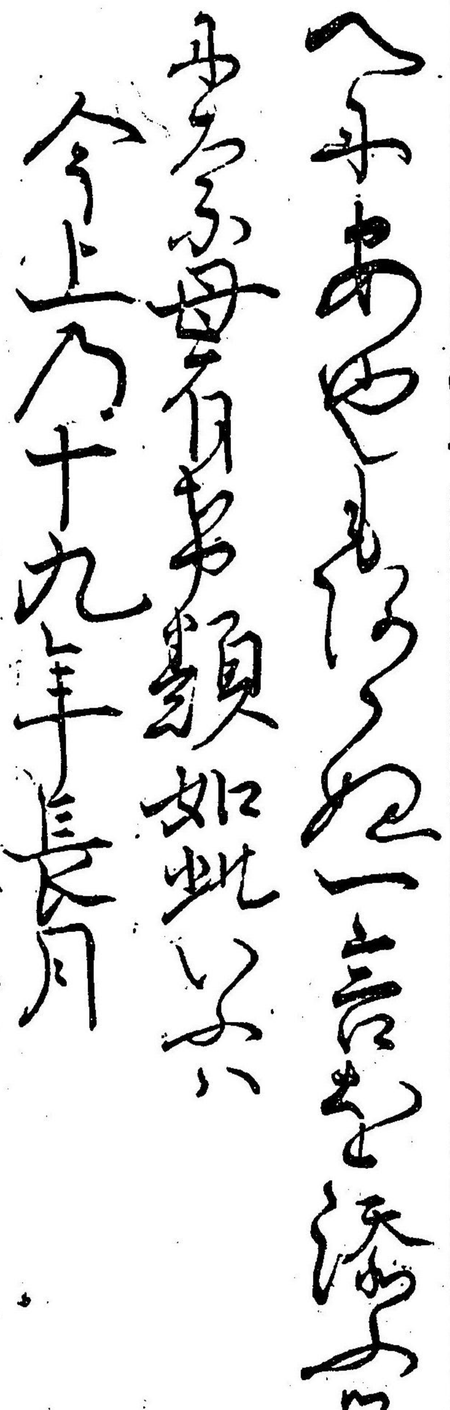
深き奥所小學ひ入
大和心を振起〳〵
惟神めゝる神事を
拜と誦て忽よすれ

皇國體歌盡

花麗作樂は愛宕山の紅
此事美しく毎年の花の春
扨ハ艶なる加島の浦の波也
師よりも丹穂はつる鳥也
萬色ハ春ハ皇國の人ハ

[illegible]
妙なる神代より御草紙
凡庸の[illegible]一本
亭部の[illegible]
書なる民部[illegible]御妙事を
[illegible]

[illegible]
潛特[illegible]
神代御[illegible]利也根[illegible]
討年止[illegible]花細[illegible]
母[illegible]
[illegible]



今上ノ十九年トアルハ　孝明天皇ノ慶應元年ナルヲ安部氏カク記サレシハ故アルヿナリ又加藤ヲ加島ト云ヘルモ此時長州ヘ潛匿シテ姓名ヲカク変ヘテ居ラレシ故ナリ今ハ安部氏此世ニモ在ラザレバ書改ルニ由ナケレバ其下書ノマヽヲ刻オクナリ

長門　安部健臣

榊陰先生著述書目

一騎歌盡	上木一卷	藩兵私考	同一卷
稽古經典大學	近刻四卷	同學記	同一卷
同弟子職	同一卷	同中庸	同三卷
同樂記	同二卷	樂調圖說 附芦菅図説	同一卷
代斲医言	同五卷	菅子牧民評注	同一卷
三躰詩諺解	同四卷	御莊子	同八卷
阿片始末考異增評	同一卷	學術論 附性道教論	洛板一卷
小學建議	洛板一卷	大學建議	一卷
皇國体歌	三卷	稽古經典孝經	三卷

誓古經典論語	廿一卷	同詩經	十卷
同書經	三十卷	同兵制	四卷
同周易	一卷	同春秋左傳	廿卷
誓古寶典古事記	廿卷	管子要語	二卷
邪教原始	一卷	宿直物語	十五卷
義人錄增補	四卷	矦國小典	五卷
保氏小鑑	三卷	私塾教率	一卷
家祭小矩	一卷	榊陰日讀	六卷
夕顔物語	一卷	題跋小品	二卷
尤氏指掌	兩面一枚摺	一萊經	一枚摺

筑波根廻	一卷	一言抄	五卷
孫子臆断	三卷	救餓錄	二卷
孟子拙辨	未定	泣血苦言	十卷
櫻川誌略 附櫻花飯記	一卷	獨歩記行	一卷
詠物百首	一卷	言志稿	若干卷
達意稿	若干卷	文雅典宝	若干卷
謀野草議	四卷	詩樂辨	一卷
孝子蒙求	八卷 内和漢廿四孝初卷官許上木		
榊陰詠草	三卷	十三山書樓集	二卷
隱居放言 一名庶識	二卷	補流兵書增補	若干卷

卷三　　舊試腹稿

卷一　　傳十傑三十五

特42
524

014635-000-4

特42-524

皇国体歌尽　上巻

加藤　熙／著

M8

ABB-1066